

ワークショップ: 意味と会話の理論における意図の役割

松阪 陽一 (Youichi Matsusaka)

東京都立大学

グライスの古典的な論文”Meaning”は、現代的な意味の理論および会話の理論に大きな影響力を与えた。そこでグライスは「非自然的意味」や「会話の推意(implicature)」といった概念を取り出し、その分析を提出したが、その分析においては話し手の意図に中心的な役割が与えられていた。グライスの基本の方針に賛成するか否かとは独立に、グライスによる非自然的意味の分析は大きな関心を集め、特にそれが要求すると思われる意図の無限背進の問題を中心に盛んに議論されてきた。

最近、三木那由他は著書『話し手の意味の心理性と公共性』において、話し手の意味の分析に関して、グライスが当初提案した仕方で意図が役割をもつことを否定する一連の考察を展開している。

本ワークショップでは、グライスに対する三木の刺激的な議論を契機にして、以下の問いを扱いたい。

1. 意味と会話の理論においてそもそも意図が何らかの中心的役割を果たすべきなのか。
2. もし1に対する答えが「イエス」なら、それはどのような役割であるのか。
3. もし1に対する答えが「ノー」なら、意味の理論は何を中心にして与えられるべきなのか。

ワークショップの具体的な計画としては、まず松阪が導入も兼ねていわゆる「グライスの還元」を紹介し、そこで中心的な役割を果たしている意図の性格について若干の所見を述べたい。次いで、三木が、『話し手の意味の心理性と公共性』での主要な議論を紹介し、意味に関する考察において意図の役割を最小化すべき理由を述べる。次いで浅利が、グライスの意味の理論における会話の推意の位置付けについての伝統的な解釈を紹介し、三木の議論を受けた上で、会話の推意の分析において話し手の意図が果たすべき役割を再考する。最終提題者として藤川が、三木の議論に対する疑問点を明確にした上で、自らの見解を述べる。最後に、会場からの質問も受けつつ、ワークショップの参加者同士で議論を深めることができたらと考えている。